

ハッブル 宇宙を広げた男

家正則 著

岩波書店 新書判 224頁 本体900円+税

エドウィン・ハッブルの名を聞いたことのない天文月報読者は皆無であろうし、「宇宙膨張の発見」をはじめとするその主な業績はいまさら紹介するまでもない。ともかく「20世紀最大の天文学者」とされる人物で、いろいろなエピソードも折に触れて耳にする。いまさらその伝記?と思われるかもしれないが、その生涯となると、通して知る機会はずしも多くない。

本書はハッブルの生い立ち、学生時代から、従軍、若き日の天文台での研究、著名人となったあとの大学・天文台での立場、そして結婚生活などを、天文学の発展を背景としながらたどっていく。天文月報の読者にとっては、研究の観点からは改めて聞くまでもない話が少なくないかもしれない。しかし、何しろ20世紀最大の天文学者の話である。一般の人からの質問を受ける機会もある。わかっていると思っても、一読の価値がある。

そして、人間的にもハッブルは興味深い人物である。学問にとどまらない才能をもちつつ、天文台や大学の周囲の人々とはさまざまな摩擦があったことも紹介されている。

何より、本書は銀河研究の第一人者による書である。聞けばパサデナ出張などのおりに少しずつ取材をしていたとか。伝記作家や科学史家の目からすると本書がどう評価されるのかわからないが、天文学者が関心をもつ話題が重視されており、20世紀前半の米国天文学界の雰囲気も伝わってくる。一般向けの書であるとともに、天文学者が読んでも楽しめる書である。

青木和光 (国立天文台)

COSMOS

超巨大ブラックホールに迫る

—「はるか」が創った

3万kmの瞳—

平林久 著

新日本出版社 A5判 176頁 本体1,500円+税

本書は、スペースVLBI (超長基線電波干渉計)の第一人者である著者によって書かれた電波天文学の入門書である。直径8mの電波望遠鏡を搭載した「はるか」と地上の望遠鏡群とが成す地球サイズの巨大な望遠鏡「3万kmの瞳」により、遠方の銀河に潜む超巨大ブラックホールを電波で明らかにする、延べ16年間にわたる世界初のスペースVLBIプロジェクトの一部始終を著した力作である。本書は、世界の電波天文学の歴史と太陽電波観測に始まる日本の電波天文学の黎明期から現在に至るまでの歴史の紹介で始まり、ブラックホールや電波天文学についての基本的な知識に加え、著者を取り巻く人間模様を織り交ぜながら巧みに解説されている。本書半ば辺りからは、「はるか」を完成させるまでの技術的な困難とそれを乗り越えるためにメーカーの技術者や同僚研究者とともに取り組んだ事例やいくつかの決断が記されており、「はるか」誕生までの過程を記した貴重な資料だともいえよう。後半では、プロジェクトになくはならなかった海外の電波天文学者との協力についての記述に力を入れてある。個性豊かな世界中の天文学者達と著者の交流の一端が、多くの写真を用いて紹介されている。

漢字には読みがなが付いており、子供が読めるような配慮がなされているが、大人でも十分読み応えがある内容となっている。また随所に人生訓や著者直筆のユーモアに富む可愛らしいイラストが配置されており、読者を飽きさせない。このイラストたちの出来栄は素晴らしく、さらに集めれば個展が開けるのではないだろうかと感心するほどである。電波天文学に興味のある方のみならず、天文ファンには一読をお薦めしたい書である。

萩原喜昭 (東洋大学)